

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

APRIL
2018

4

結納を知っていますか？

〽街道看板紀行 其の一



街道の看板に導かれ 商業の町、大野へ

知多市方面から海岸沿いの常滑街道(国道155号の旧道)を南下していくと、新舞子駅の先の踏切脇に大きな黄色の看板が目に入る。この先の大野にある「白木屋結納店」の看板だ。

赤い帯に太い文字で店名が書かれ、左上には丸い眼をした二匹の鯛が逆立ちしたイラストが添えられている。日常生活であり聞くことのない「結納」という文字と、不思議な鯛の絵があいまって、そのインパクトはなかなかのもの。その鯛のように思わず目を見開いて看板を凝視すると、真ん中に「製造販売」と記されていることに気付く。いったいどんな店なのだろうか。

その白木屋結納店は、常滑街道沿いの大野の中心部、矢田川に架かる大野橋を渡つてすぐのところにあつた。間口の広い二階建てで、看板と同じ書体の大きな店名サインが軒を飾っている。祝い事に関する店らしく白壁に赤字で、商店が軒を連ねる町の中でもその存在感は随だ。中に入ると、店の半分には箆笥や乳母車などが並び、スペース、もう半分はテーブルを囲むようにガラスケースが並び、その中に色鮮やかで華やかな「結納品」がずらり並んでいた。

「いらっしやい」。

突然の来訪にも関わらず快く出迎えてくれたのは、長年に渡り店を切り盛りしてきた新美文男さん、末代さんご夫妻である。

* * *

白木屋結納店がどのような店かを紹介する前に、そもそも「結納とは何か」を説明しておいたほうがいいだろう。五十年代後半以上の人には説明も不要だろうが、それ以下の世代だと経験者はぐっと減り、「婚約に関する儀式」ということは知っていても内容が分からないという人も多いのではないだろうか。

広辞苑を引くと、次のように説明されている。

婚約の証として、婿・嫁双方から金帛・酒肴などの音物を取り交わすこと。また、その品。

普段使わないような言葉で解説されてもわかりづらいので、言葉を分解してみよう。金帛の「金」は金銭、帛は絹織物のこと。酒肴は、酒と料理。音物は贈り物のこと。

つまり結納とは、結婚する二人の家が「確かに婚約しましたので、今後は親戚としてお付き合いの程、よろしく

結納を知っていますか？

～街道看板紀行 其の一

歴史ある街道を辿っていると、興味深い看板をよく目にする。

たかが看板と侮るなかれ、

そこには地域にまつわる様々な話題が隠されているのだ。

看板を足掛かりに地域の文化や歴史を探る旅の第一弾、

まずは常滑市大野からスタートしよう。

お願いします」という意味を込めて、金銭を含む贈り物を交換することである。民俗学辞典によれば、二つの家が姻戚関係を結ぶために共同で飲食するときの酒肴を意味する「ユイモノ」が語源という。ユイ、すなわち「結い」だ。

その起源は古代中国に定められた「六礼」という婚姻の規定まで遡るといふ。六礼は、納采・問名・納吉・納徴・請期・親迎の六つの儀礼から成る。このうち「男性の家が仲人を介して礼物を贈つて求婚し、女性の家がそれを受け取ることで求婚を承諾する」意味の「納采」が、四・五世紀の日本に伝わった。大阪・堺市の前方後円墳で有名な仁徳天皇の皇太子が、黒媛を迎えるにあたり贈り物を贈ったのが日本における結納の最初と言われている。これは、今も皇室儀式の「納采の儀」として続いている。

納采Ⅱ結納はのちに公家、さらに武士も行うようになった。庶民にも広まったのは江戸時代の終わり頃になってからという。

結納で使われる贈り物は、単なる「プレゼント」や「土産」ではない。二人が結ばれると同時に、両家が親戚として結ばれるという厳粛なハレの儀式では、贈り物にもやはり一定の形式があり、日常生活の中で用立てできるも

のばかりではない。そもそも、一生のうちになびたび行うものでもないのに、何を用意してどう段取りすべきか、一般家庭ではなかなかわからないものだ。

そこで登場するのが、必要な品々を用意し、適切なアドバイスを両家に行う結納店である。

覚えておくべき役に立つ 結納のイロハ

「嫁入りの場合の結納品は、迎え入れる男性側の親が、送り出す女性側の親に対して贈るものです」。

まずは結納についての基本中の基本を、新美文男さんに教えてもらおう。最大のポイントは、家対家の儀式であること。ゆえに、一方の親からもう一方の親へ贈るという形になっている。そこにあるのは「感謝」と「礼節」だ。

「これから嫁いでくる大事な子を、これまで立派に育ててこられた相手の親御さんやご先祖様に感謝する。それを結納品という形にして贈るんですよ」。

そう説明するのは末代さん。縁あって結ばれた二人が二つの家をつなぎ、これから親戚づきあいを始めるにあたって、礼を尽くすことを第一に重んじる。結納品はその証ともいえる。

結納が一般的だった頃には、料亭や料理旅館などで執り行うことが多く、

大野だと市兵衛という店がよく使われたとか。また、自宅で行うこともあった。昭和四十二年に結婚した文男さんと末代さんの場合も自宅だったそう。で、末代さんの実家の岐阜県多治見市まで結納品を持って出向いたという。

「ただ、夫となる男性は結納の席に同席しないというのがしきたり。結納を交わして正式に婚約が決まるまでは、相手の家の敷居を跨ぐことはできなかったんです。私が同行したのは仲人と両親を道案内するためだけ。仕方がないので結納の間は、多治見市内の映画館で時間を潰していました」。

その結納品の基本形は次の七品。

熨斗(のし)
小袖料(こそでりょう)
家内喜多留料(やなぎだるりょう)
寿留女(するめ)
子生婦(こんぶ)
志良賀(しらが)
寿恵広(すえひろ)

いかにも縁起の良さそうな文字が並ぶが、どんなものなのか字面だけ見てもさっぱり分からないので、お二人に解説してもらった。

まずは熨斗。これは贈り物に添える飾り物のこと。贈答品の包み紙の右上に、縦長で六角形のもが描かれてい

るが、あれがそう。ただしそれは簡略型で、「本物」は、長寿の象徴とされる鮑を叩いて薄く長く伸ばし、紅白の紙で包んだもの。熨斗Ⅱのしは「伸す」の意味で、本来は「伸し鮑」だが、略して「のし」と呼んでいる。ただ、今や鮑は高額で入手が難しいので、昨今は似せたビニールなどで代用している。

「昔は鮑を仕入れて、木槌で叩いて伸ばしたものです」。

小袖料は、結納金のこと。「包んだそのお金で小袖(着物)をお買いください」という意味で、衣装代と言うより結婚の支度金と広く捉えたほうがよい。昔は花嫁衣裳そのものや反物を贈ったが、嗜好の多様化で現金に変わっていったという。

家内喜多留料は、清酒料のこと。「柳樽」は角樽ともいい、両側に長い柄が付いた祝儀用の赤い酒樽で、昔は酒の入った柳樽そのものを結納の時に持参した。ちなみに知多半島では、家内喜多留料とは別に「二升瓶の清酒」「つば酒」を贈る独特の風習がある。「二升は「生連れ添う」に通じ、本来は結納の日取りを決めるときに仲人が持参するものだったが、いつしか結納品のひとつに変わったとか。

寿留女と子生婦はそのものだ。「するめ」は噛めば噛むほど味が出る夫婦になるように、「こんぶ」は子宝に恵ま

れるように、という意味。噛めば噛むほど味が出る夫婦、というのが、よくわからないような、なんとなくわかるような…。既婚の読者の皆さんの家はどうかろう？

志良賀は、白く長い麻である。麻は実用品で、御札を家の柱に括り付けたりにするに使われた。これは老夫婦の白髪に見立てたもので友白髪ともいい、「共に白髪になるまで長く添い遂げましょう」という意味が込められている。

最後の寿恵広は「末広」。末広がりの形をした扇子のことで、先々まで家が繁栄することを願うもの。

ちなみに、婿養子を迎える場合にも女性の家から男性の家に結納品が贈られるが、このとき小袖料は「御袴料」に、寿留女は「勝男武士」になり、子生婦は「幸運夫」に書き換えられる。また、上記七品のほかに「御迎江増利(お迎え草履)」「優美和」「賀附寿」「御目出鯛」「宝船」などが加わることもある。

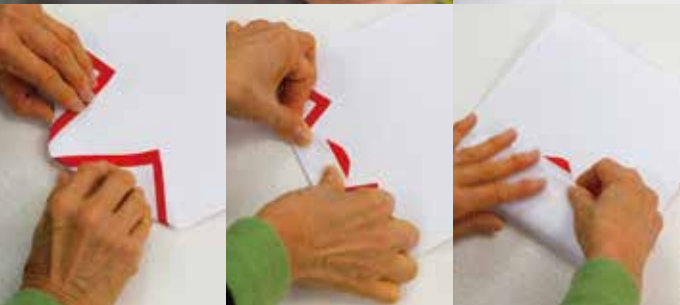
こうして並べ立てると、仰々しいうえにお金もかなり、少し面倒にも感じる。しかし末代さんはこう話す。

「結納という手順をしっかり踏むことで、男性も女性もこれまで育ててくれた親への感謝が湧いてくるもの。それに、結婚という人生最大の行事に臨む心構えもできますしね」。

目出たさに満ちあふれた“結納用語”の基礎知識



熟練の手による精緻な結納品は、華やかで気高い



文男さんが細工した水引を、末代さんが折った紅白の奉書紙(ほうしょがみ)に取り付ける。結納に特有の細工や折り方がある。



境界を越えれば風習が違う 結納が語る地域性

白木屋は大野きつての古い家のひとつで、文男さんで十二代目になる。江戸時代には薬屋、明治以降は酒の小売店などを営んでおり、結納店は文男さんの母、良子さんが、犬山の実家が営む結納店にならって戦後に始めた。父の文平さんは近くの会社に入社に勤めていたが、達筆だったので注文が入ると家に帰って目録を書いていたという。鷹揚な時代だ。

しておきたいという人も多かったんで「す」。

ところで、常滑街道沿いで見つけた看板には「製造販売」の文字があった。一体、結納品のどの部分を作っているのかというと、ひとつは水引の飾りだ。水引は、贈答品の包みや御祝い金の封筒などに、蝶のような形にして掛けられている帯紐のこと。和紙をこより状にし、糊と水を引きいて天日で乾燥させたもので、長野県飯田市をはじめ愛

一生の思い出になる 華麗な手作りの結納品



媛、石川、福岡、京都などで作られている。水引は細長くまっすぐな状態で出荷されるので、入荷した結納店ではこれを結び、結納品に添えるのである。

和紙できた水引はやわらかく、一本で駒結びをするくらいなら子供でもできるのだが、結納品には、金銀あるいは紅白の二組の水引を数本ずつ束ね、双方を組み合わせて決まった形に整え、しかも二人の結びつきを強くするという意味があるので簡単にほぐれないようしつかりと結ばねばならない。この複雑な形を、美しく、固く結ぶには、やはり技術がなくてはできない。「ちよつとやつてみようか。昔は切れ端でよく練習したものでね」。

そう文男さんは言う、話をしながらものの数分で御祝儀袋に定番の形を結びあげた。巧みなその指さばきに思わず唸る。

「水引は一気に作っていかない、金銀が剥げ落ちてしまうんです」。

なるほど、熟練の技だ。

ショーケースの中に飾られた結納品には、松竹梅や鶴亀などお馴染みの縁起物も添えられている。また、祝い事の酒器に付ける「銚子飾り」というのもあり、これらの複雑で立体的な水引ももちろん手作りである。

一方、末代さんは目録などの文字を担当する。現代なら、それらしい書体

をパソコン入力してプリントアウトすれば簡単なことだが、結納でそんなことをする訳はなく、一組一組、定まった書式に基づいてすべて墨書する。

末代さんが書いた字を見せてもらうと、いわゆる書道の美しい文字とはちよつと趣が異なる。崩し方やとめはねが独特で、軽やかなのだ。文字にどこか祝祭感があり、めでたい席にはふさわしく思える。

「お義父さんが字の達者な人で、私はそれを手本に練習をしました」。

定番の結納品のほかにも、ショーケースには豪華で大きい「宝船」や「羽子板」が飾られており、目を奪われる。厳肅さのある結納品とはやや雰囲気が違うので単に店内の賑やかしのものかと思ったら、こちらも結納に関係する品で、しかも手作り品というから驚いた。

「宝船は『呉服細工』ともいい、着物に使う生地や帯紐などをそのまま相手に贈らず、縁起の良い宝船の形に組み合わせたもの。贈られた女性の家は、嫁入り道具を運ぶトラックの運転台の上などにこれを取り付けました。平成の初めころまではやっていた家もあったけれど、さすがに今は宝船の注文はまづないですね。羽子板は、結納品を飾った水引を使った記念品です。せつかく詠えた結納品なので、こういう形で残

家具や乳母車、遊具の販売も当初から行っていた。結納を交わして結婚が決まれば家具が必要になる。結婚生活を始めればやがて子供が生まれ、乳母車や遊び道具が必要になる。ということから、こうした品々も扱うようになった。今風に言えば「結婚・子育てのスタートをトータルでバックアップする店」というところか。

かつては、結納は結婚に欠かせないものだったので注文もひっきりなしに入り、ピークの時は夜中までかかつて結納品を作っていた。跡を継ぐ文男さんも嫁いだ末代さんも、良子さんに仕事を教わりながら仕事に精を出した。文男さんは、結納品作りだけでなく、

セッティングや「式の進行指導」のため各地に出向いた。結婚する家にとってはその何度も行うものでもないもので、どうすべきがよくわかっていない人も多かったのだ。

「うまく取り持たないと破談になってしまうこともあるので、責任は重大でしたよ」。

営業範囲は、常滑市内を中心に知多半島全域に及んだが、遠方の家と縁を結ぶ場合も多く、土地ごとの違いを目の当たりにしてきたという。

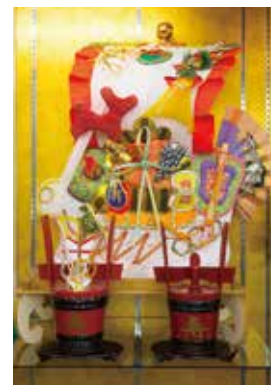
「愛知県では岡崎、名古屋、清洲など城下町とその周辺で豪華にする傾向があります。また、漁師町として栄えた町も派手ですね。伊勢湾の向こうの



昭和60年に撮影された結納品一式。家で執り行う場合は、このように床の間にずらりと並べられた。右奥に立てられているのは「宝船」。



末代さんが手本にした義父の目録



立体的な造形が見事な「宝船」



華やかな水引細工を用いた羽子板



下段中央、下に長く伸びるのが熨斗

三重県もそうで、結納に臨席する一人につき鯛か伊勢海老を二匹ずつつける家が多かったです」。

先にも少し触れたが、知多半島のなかでも様々なしきたりがあった。結納の席の料理代は、一般的には女性の家が持つことが多いが、半田や武豊では男性の家が持つのが通例だった。阿久比では、結納を執り行うことを近所に触れまわり、結納の様子をこぞって見に行くという習慣があった。

また、大野谷内陸部の矢田や大興寺では、結納の際に周囲の家に牡丹餅を配るならわしがあった。あるとき文男さんがこの地区の結納を手伝った時、おすそわけに牡丹餅をもらった。大野ではそういうことをしなかったので、牡丹餅が何を意味するのかかわからず戸惑ったそうだ。

かつては盛んだった結納も、時代の流れで平成の初め頃から次第に少なくなっていくという。それにあわせて各地にあった結納店も減っていったが、知多半島で唯一、愛知県でも希少となった白木屋には、遠来からの注文や問い合わせも多いとか。

結納は地域によって異なり、また時代によって変化してゆくもの。伝統と技術を後世につなぐ結納店は、これからも地域と時代を見つめ続けてゆくだろう。

結納にまつわる数々の風習は、地域性と時代を映し出している



取材協力◎白木屋結納店 参考文献◎民俗学辞典(柳田國男監修・東京堂出版)

《訂正とお詫び》2月号の特集「衣浦港の60年」の記事中、P08上段20行目「平成二十五年に改修されてバイオマス混焼発電ができるようになり…」は、正しくは「平成二十七年」でした。お詫びして訂正いたします。